

中国の伝統文化をめぐる状況と見解

—日本「伝承文化と生涯学習」研究会との交流から—

張 妙弟 張 帆

張 周伯 訳

(日本語校閲：渡邊洋子)

Current Status and Some Opinions on Chinese Traditional Culture;
in response to the academic exchange with the Japanese study group

ZHANG Miaodi ZHANG Fan

ZHANG Zhouzhou (trans.)

WATANABE Yoko (Japanese reviser)

はじめに

2008年10月、日本の京都大学、新潟大学、新潟経営大学、東京学芸大学の教員からなる「伝統文化活動」研究チーム一行が、北京聯合大学を訪問した。その際、第一執筆者の張妙弟が、同研究チームとの座談会で、北京市の文化遺産保護と伝統文化教育における活動について講演を行い、自らの体験と見解を述べさせていただいた¹。本論は、座談会終了後に同チームの要望を受け、張妙弟の同日の講演を踏まえつつ、第二執筆者の張帆とともに執筆したものである。

1、文化をどう理解するか

「文化」という言葉の理解のしかたは、さまざまである。例えば「五花八門」(中国語で多種多様の意)、「三教九流」(以前は宗教と学術の各流派を指したが、現在はさまざまな職に就く人のこと)、「三百六十業」(さまざまな業界の意)など、いずれの言葉でも、文化の多様性をすべて包括的に表現することは難しい。「文化」についての理解が、人々がおかれた環境や人生経験、ものの受け止め方によって異なることは言うまでもないが、文化の専門的研究をする学者の中でさえ、「文化」の定義は、目を見張るほど多い。とはいえ、複雑な文化現象やその分類体系においては、一定の規則性を見ることができる。以下に挙げるのは、筆者たちが考える「文化」の定義である。

(1)「文化」は、「自然」に対置されるカテゴリーに属するものである。地球が進化する中で、人類が自然界と相対して労働し、思考し、社会を構成する過程の中で現れてきた人間特有の現象を総称するものと定義される。この意味では、文化と文明は同義語なのである。

(2)「文化」は長期にわたり、人間が生産し生活し発達する中で形成され、成長し、成熟してきたものである。寒くなると身体を温め、喉が乾くと水を飲み、お腹が空くと食物を食べた。銃を用いて狩猟するために、矢を製造した。人の交流によって言語、文字、インターネットが生まれ、家庭と社会関係によって倫理が生まれ、集団利益によって政治と戦争が生み出され、社会生活によって民俗が形成された。さらに、この形成、成長、成熟の過程は、今後もずっと続いていくのである。これはまさに、「文化」の「化」という文字が持つ意味を示していると言えよう。ゆえに第一点と合わせると、「文化」とは「文明化」のことだとも言えるのである。

(3)物質文化であれ、非物質文化であれ、「文化」は人間の発展とともにたえずに変化しつつある。21世紀の人間が、樹穴や洞窟に住んだり生の獣肉を食べたりできないのは言うまでもないが、彼らは、ただ携帯電話を三日間使えないというだけでさえ、周章狼狽してしまうだろう。このような変遷は、必然的なものと言える。変遷とは、「揚」と「棄」の二つ部分からなるものである。「揚」とは、伝統文化の精髓を継承、発揚、革新することであり、「棄」とは、滓を捨て、不合理な部分や不完全な部分を改善することである。「揚」があるこそ、「文化の蓄積」がなされてきたのである。だから、我々はよく「歴史が長い、文化の蓄積が深い」という言葉を使って、あるものを表現する。蓄積がなければ、文化が深まらないからである。これはまさに「歴史を切り刻むことはできない」との言葉の意味するところを示すものであろう。

引き続き、「蓄積」について述べよう。既述のように、文化は「人間の影」ともいうべきものであり、人間と切り離すことはできない。その上で、「文化」は変遷しつつある。「文化」はこの過程の中で、蓄積されていくのである。変遷とは、「文化」の蓄積における変遷であり、蓄積とは、「文化」が変遷していく中での蓄積なのである。その意味で、変遷の中核（コア）は蓄積である。人間は蓄積することで進化しているのである。そのため、今日に至って、われわれは「伝統文化」と「文化遺産」を保護している。「伝統文化」と「文化遺産」は、「文化」の変遷と蓄積の中で形成されるものである。長い年月にわたり、「文化」における真・善・美の部分（たとえば思想、表現など）が沈殿し、「伝統文化」と「文化遺産」として残されてきたのである。無論、滓の部分は排除されてしまっている。

(4)「文化」とは総合的なものである。より適切に言えば、いずれの文化現象も、総合的である。思想、理論、考え方、言語、文字、音楽、政治体制、宗教、民俗など、一つの例外もなく、総合的なものである。これらの文化現象は、多様で総合的であるか、変遷的で総合的であるか、交差的で総合的である。例えば、北京にある、文物古跡とされるどの古代建物も、封建社会の建築物や建築材であるのみならず、その時代の都市設計、建築の論理思想、風水理論、建築技術、装飾の芸術加工に関わる考え方や技能などを反映するものである。物質文化と非物質文化がこの建物において統合され、交差している。とはいえ、このような古代建物は一般に、物質文化遺産の範疇に入れられる。有形の物質文化の方が、注目を集めやすいのである。そのため、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が文化遺産を「物質文化」と分類することに対して、

学界では異論がある。このようなことから、われわれは、文化現象は総合的なものであり、純粋な文化など存在しないことを多くの人々にわかってもらい、分類の問題によってわれわれの仕事が妨げられないようにしたいと考えている。

(5)「文化」には、民族性、国家性、地方性がある。「文化」は実践的な産物であり、人間は異なる民族や国、地域でこの実践を行っている。民族で言えば、異なる民族が異なる環境に暮らし、異なる歴史を経験しているのである。海洋民族と山地民族、熱帯民族と寒帯民族、農耕民族と遊牧民族、それぞれが異なった民族文化を有している。異なる国は異なる文化を有するに違いない。同じ国であっても、各地で環境と風習が違うため、形成された地方文化が異なっている。中国の場合、過去には、燕趙文化、齐鲁文化、三晋文化、楚文化、呉越文化などがあったし、現在、専門研究機関で行っている地方文化に関する研究対象には、北京学、徽学、巴蜀文化、齐鲁文化などがある。北京市には、門頭溝区の永定河文化、宣武区の宣南文化、通州区の大運河文化、西城区の什刹海文化に関する研究機構がすでに設立されている。伝統文化は保護され、伝承され、発揚されるべきである。その中の民族文化、国家文化、地方文化はどちらも重要であるが、地方文化はとくに重視されるべきと思われる。地方文化は民族文化、国家文化の礎であり、源でもあり、それを体現するものでもあり、さらには、世界の文化の多様性を、視覚的に十分に示すことができるものでもある。

(6) 文化は絶えず「激変」している。「激変」は既述の「変遷」と同義であるが、現在社会における文化は以前と比べ、より幅広くより迅速に変遷しているという点を強調すべきであろう。都市化、工業化、ハイテク産業化、経済的グローバル化が加速するにつれ、文化の変遷はますます広く速く進行する。そのため、伝統文化に関わる仕事は難しくなってきたが、このような激変を拒むことは不可能である。われわれは、激変の中で伝統文化を守り、伝承し、教育と誘導を通して、伝統文化の仕事を進めるべきである。

2、北京市における近年の文化遺産の保護をめぐる動向

文革前期の「破四旧」運動²への反省を踏まえ、国から地方に至る「伝統文化」に関わる仕事が無駄かたっていないほど重視されるようになり、そこで大きな成果が得られてきた。

文化遺産については、広義と狭義の理解がある。ここでは、ユネスコの狭義の理解を引用する。それによれば、文化遺産とは、文物³、建築群、遺跡の三つに分けられるもので、物質的・有形的・実的存在であり、実物として触れることが可能な文化表現である⁴。

北京市には、世界文化遺産は6箇所あり、文物保護機構は1400箇所を超え、古跡（旧跡）は約7000箇所ある。近年、北京市政府は文化遺産の保護に力を尽くしており、文化遺産保護の多くの経験を積み、喜ばしい成果を得た。

財政面においては、北京市文物局が発表したデータによると、2000年～2007年の間に北京政府が文物修繕にかけた費用は9.3億元に達し、この8年間の支出は過去60年間の3倍にあたるこ

とが分かった。とりわけこの「3.3億プロジェクト」によって、北京における文物建築の保存危機が大いに緩和された。さらに6億元をかけた「人文オリンピック⁵文物保護計画」では、資金面から文物保護を保障したので、以前の緊急修繕のやり方から主動的予防的修繕への変更が徹底された。北京市の文物保護は、「保用併挙、景観回復」（保護しながらの文物の使用と並行して、修繕して本来の様子を再現させるの意）の方針に基づいて進められている。

文物の保護理念の面では、遺産の原真性（本来の様子、性質の意）と完備性の原則に基づいた、伝統的な修繕方法と保護手段をとる。つまり、文物の原状と歴史の痕跡をできるかぎり残すために、工事中に原来の工芸・材料・方法を厳密に守るのである。例えば、木製部材を保護するために使われた塗装工芸は1990年代、後継者が途絶え、技術が伝承できなくなるという危機に何度も直面した。その後、多くの実験を重ね、ようやく塗装工芸の肝要な技術が見つかった。この技術は以後、故宮、頤和園、北海公園、天壇公園などの文物建築の修繕工事中に取り入れられ、北京市文物主管部門や建設会社から好評を得た。そのほか、例えば、故宮や天壇公園の修繕現場で、作業員がセメント路面を撤去し、元来の工芸で造った金レンガに付け替えている場面もよく見られる。

法制度整備の面では、北京市は積極的に取り組んでいる。1980年以降今日に至るまで、北京政府は、北京におけるいくつかの世界文化遺産の保護条例を公布してきた。

名 称	公布及び改正時間	公 布 形 式
北京市周口店北京猿人遺跡保護管理法則	1989年公布 1997年12月31日改正	市政府令（1989年第1号令 1997年第12号令）
北京市明十三陵保護管理法則	2002年7月16日公布 2002年9月1日施行	市政府令 （2002年第101号令）
北京市長城保護管理法則	2003年5月22日議決 2003年8月1日施行	市政府令 （2003年第126号令）

技術革新の面では、北京市は文物遺産のそれぞれの特徴に基づく新しい技術や工芸の開発に取り組んでいる。このように、技術の革新と遺産管理は、有効な形で融合されるようになった。例えば、故宮武英殿の修繕工事にはリバーシブル技術が採用され、ホールには展示スペースが設置されるなど、建物の原状を壊さずに、新しい機能が加えられた。2005年10月に半年間しか公開されなかった故宮午門展示ホールは、ユネスコから「文化遺産革新賞」を受賞したのである。

3、北京市における近年の非物質文化遺産の保護と伝承

1989年以降、非物質的な文化遺産についてユネスコは、「民間創作」、「口承および非物質的遺産」などの名称を一度採用したが、最終的には、「非物質文化遺産」という名称に確定された。名称は変更されたが、中核となる内容は、根本的に変わっていない。非物質文化遺産に該

当する条件は、原始性、民間性、絶滅危惧性と多様性を有することである。

北京市は、既述した「文化遺産」と比較すると、非物質文化遺産の保護活動は遅れて展開されたが、施策が実行されるスピードは迅速であった。『我が国における非物質文化遺産の保護活動の強化に関する国务院办公厅（内閣官房）の意見』の施行を徹底するため、北京市人民政府官房は2006年初頭に、『北京市における非物質文化遺産の保護活動の強化に関する意見』（京政令「2006年」1号）を公布し、全市の非物質文化遺産の保護についての会議を開催した。「普查プロジェクト・伝承プロジェクト・文献プロジェクト」（全面調査・伝承重視・文献重視）の原則に基づき、帳簿への登録を完備し、北京市における非物質文化遺産の保護と伝承を全面的に推進していくことが明言された。

北京市の全面調査は2005年4月以降、市文化局をはじめ、全市各部署、各区県で展開された。北京市は、全国に先駆けて全面調査を完了した都市である。（他二つは浙江省と雲南省である）。全市調査に参加した人は2000人以上、関連項目は7000項あり、その中で、台帳に登録されたのは3300項あまりである。この全面調査によって、北京市にある文物の概況・種類・数量・分布状況・保護の現状および課題が明らかになり、文字、録音ビデオ、デジタルメディアなどを活用して、文物が分類整理され、書類とデータベースが作成された。中でも、区県別の『北京市非物質文化遺産資源叢書』と『北京市非物質文化遺産学術叢書』など国家ランク⁶の叢書が相次いで出版され、『智化寺京音楽』のような国家ランクの項目と『五音大鼓』のような市ランクの高度画像認識画面による宣伝映像の撮影も続々と完成し、また全面調査と申告のために収集・整理した資料のデータベースも作成している。2004年以降、北京市が非物質文化遺産の保護に投入した金額は全国1位となり、3900万元に達している。

現在、北京市の非物質文化遺産には、国家ランク70箇所と北京市ランク153箇所がある。非物質文化遺産の伝承者は、国家ランクが27人と北京市ランクが94人いる。非物質文化遺産の専門博物館・民族博物館・教育機構は、61箇所ある。

北京市は、非物質遺産の保護に関する立法化にも取り組んでいる。2005年以降、「北京市非物質文化遺産保護条例」、「北京市非物質文化遺産目録管理暫定法則」、「北京市非物質文化遺産伝承者認定および管理暫定法則」などが起草され、これらの法律は順次、議事日程に組み入れられてきた。目下⁷、「非物質文化遺産保護法」が、全国人民代表大会で審議段階に入っている。河北省や山西省では、非物質文化遺産の保護に関する法律の立法を省人民代表大会の立法計画に組み込んだ。北京市も今後、関連する法案作成の作業が進む見込みである。

「人文オリンピック」⁸を契機として、「非物質文化遺産」の保護活動が、北京で繰り広げられた。2008年6月14日は第三回「文化遺産日」に当たったが、この間、文化部や国家文物局は北京市政府と連携して、「2008年文化遺産日」に関する一連のイベントを実施した。そこでは、100回近くの文化遺産展示会、公演、講座が実施された。同年6月から9月初頭まで、北京民族文化宮においては「人文オリンピック」非物質文化遺産の展示会が58回も開催され、文化の一大ブームになった。また同年7月に、「非物質文化遺産」の要素が多く含まれる「オリンピック歓迎、オールスターズ優秀番組展」、8月には「中国非物質文化遺産伝承技巧公演」が開かれた。このような活動を通して、「人文オリンピック」の内容だけでなく、非物質文化遺産について

も市民に知られるようになった。

オリンピックとパラリンピックの期間中、「チャイナストーリー」と銘打った文化活動が「祥云小屋」(シャウン・ハワイス)⁹という30館の展示館を通して開催され、参観者は、我が国の豊富で多彩な「非物質文化遺産」の資源を目の当たりにした。各地の行政の文化部署も、特色ある「非物質文化遺産」番組づくりに取り組み、北京オリンピック開会式前の「ラッキーオリンピック」という公演に参加した。最も多くの視聴者が参加した「非物質文化遺産の展示会」としてはもちろん、北京オリンピックの開会式が挙げられる。同開会式では、昆曲、琴、ひっぱり人形、活字印刷の伝統の技のみならず、古代の舞踊(缶をたたきながら歌うもの)も演じられた。この開会式は、数十億の世界の視聴者に中国文化を披露するものとして、高い評判を得た。

北京市政府は現在、「非物質文化遺産」の伝承に関わる問題に取り組んでいる。「非物質文化遺産」の伝承、伝承者の生活状況と利益保護などは、政府と社会からますます注目されるようになってきた。2008年、北京市政府はこれらについて、多数の人員を集結して専門的な調査を実施した。われわれ北京聯合大学北京学研究所も、同調査に参加した。政府の支援のもとで、「非物質文化遺産」の保護に携わる各界の識者が努力を重ねることにより、「非物質文化遺産」の伝承者にかかわる諸課題が解決され、「伝承」の「春」を迎えることができると信じている。

4、北京市における近年の伝統文化教育と研究活動

近年、「国学」という旗を掲げた伝統文化教育の活動は盛んに行われている。そのなかで、最も影響力が大きいのは、中国中央テレビの科学教育チャンネルの「百家講壇」という番組である。同番組は2001年に初めて放送されて以来、人気があり、現在は科学教育チャンネルの名番組になった。同番組は文化をめぐる取材範疇が非常に広く、学理性と権威性を尊重しながら、一般民衆が受け入れやすい内容を取り入れ、奥深い知識をわかりやすい表現で伝えることに工夫しているため、国民に好まれている。そのなかには、閻崇年氏の「清十二帝王疑案」、易中天氏の「易中天品三国」、于丹氏の「于丹〔論語〕心得」、紀連海氏の「正説紀曉嵐」、蒙曼氏の「武則天」馬未都氏の収蔵シリーズなど、有名な講座がある。上に挙げた人物のうち、易中天氏以外の語り手は全員、北京市の文化学者である。

「百家講壇」のほか、大きな影響力をもつ番組や講座は、鳳凰テレビ(中国語版)の「世紀大講堂」、北京大学の「世紀大講堂」、国家図書館の国学シリーズなどである。前二者の取材範疇はやや広いが、伝統文化に関する内容が一定の割合を占めている。

北京市の重要な文化機構である首都図書館や首都博物館も、これらの後を追うように、相次いで北京の伝統文化(特に北京文化)の教育に全力を挙げてきた。首都図書館では数年前から郷土文化シリーズ講座が開設され、非常に人気を集めている。とりわけ、「南鑼鼓横丁の沿革及びその地理的特色」、「戒台寺と五大名松」、「菜市口周辺の名人旧居」、「北京の皇室公文書館」、「京味曲芸」、「老北京二十商業広告」、国家非物質文化遺産としての「北京空竹」、「妙峰山の廟会」などはいずれも、人々の心に沁み込むように学び取られ、北京の文化を浸透させるもとに

なったのである。首都博物館も所蔵する豊富な文化資源を利用して2008年から連続講座を設け、北京文化を通して人々の関心を集めている。

2009年2月の現時点で、北京市の高等教育機関（中央各省の直轄学院、北京市直轄学院及び民営高等学校）における伝統文化人材の養成は、三つの方式で行われている。第一は、漢医学、体育、劇曲、舞踊、工芸美術、古代建築などの高い専門性をもつ人材の養成コースである。これは専門学校に設置され、総合大学には少ない。第二に、中国言語文学、古文、哲学、宗教など言語や人文思想の基礎研究に従事する人材の養成である。これは総合大学が担っている。第三は近年、文化遺産専攻の人材を養成するために設置された文化遺産専攻コースである。実数はまだ少ないが、注目されている。その事例を二つ紹介しよう。

一つは、中央美術学院人文学院の文化遺産学部・研究科である。同学部・研究科は国内外に向け、学部生・修士課程・博士課程と科目履修生を募集している。学部科目には、「古代書画鑑定概論」「書画修復と臨模（書画を模写するの意）」「美術考古学」「文化遺産学」「民間美術学」がある。大学院課程科目には、「古代書画鑑定方法研究」「美術考古学研究」「古墓美術研究」「文化遺産理論と管理研究」「非物質文化遺産研究」「民間美術造形」「色彩研究」がある。同学部・研究科は、国内の高等教育機関、博物館、美術館、文物考古機関に加え、マスコミ、出版社などの組織に人材を送り出すため、文化遺産の理論知識と実践能力を重視しており、管理、復旧、保護、研究、教育、企画、展示の専門知識をもつ人材の養成を担っている。

もう一つは北京理工大学デザイン芸術学院の文化遺産学科である。同学科は文化遺産の芸術研究をメインとして設置されたコースである。専攻領域としては「文化遺産」「自然遺産」「非物質文化遺産の価値鑑定」「保護と管理の研究」「歴史建築と環境保護」「博物館の展示デザイン」などがある。同学科では、学生に十分な専門的・基礎的知識、文化遺産の歴史的価値、科学的価値および芸術的価値とともに、文化遺産の調査方法や保護方法なども指導している。設置科目には、「文化人類学概論」「中国物質文化史」「人文地理学」「中国通史」「文化遺産概論」「中国美術史」「中外建築史」「博物館学概論」「文化景観概論」「民俗学概論」「宗教芸術」「美術考古概論」「中国非物質文化概論」「文化遺産管理」「博物館展示デザイン」「都市景観デザイン」「歴史町の保護と企画」「中国伝統家居デザイン」などがある。同学科で四年間勉強し、良好な成績で合格すれば、文学学士の学位が取得できる。卒業生は博物館、展覧館、旅行会社などに就職するか、専門的な文化遺産研究機関で、文化遺産価値の研究、文化遺産の保護・管理、博物館の運営・管理などの仕事をするのである。

北京地域における高等教育機関や研究所にも、伝統文化の研究機構が設置されている。以下、具体例を挙げてみよう。まず、北京大学世界遺産研究センターが挙げられる。同センターは1998年に設立され、創設者は有名な風景学専門家の謝凝高教授である。同じ北京大学の文化資源研究センターは2006年に成立され、創設者は北京大学の学者李零氏、張頤武氏と台湾学者龔鵬程氏である。また清華大学文化遺産研究所は、清華大学建築学院歴史研究所を前身とするもので、古代建築、古村、古跡、古石窟などの文化遺産の保護、研究をしている。さらに、中央

美術学院非物質文化遺産研究センターでは、非物質文化遺産と民間美術を研究している。センター主任は専門家の喬曉光教授である。さらに、北京師範大学民俗典籍文字研究センターは2000年、従来の民俗学学科、典籍文献学学科と漢言語文字学学科を統合する形で設立されたものであり、質の高い研究を行っている。

中国芸術研究院は、わが国唯一の国家ランクの総合的芸術研究機関である。同院は、12の専門研究所、14の専門研究・創作部門、12の雑誌社（編集部）と大学院、出版社などの機構から組織されている。ユネスコの「アジア・太平洋地域の伝統と民間演芸芸術データベース」に登録されている「中国第一期保護研究機構」5箇所は、すべて同研究院にある。さらに、中国民族民間文化保護プロジェクト国家センターも、同研究院に設置されている。一方、中国科学院伝統工芸・文物科技研究センターでは、伝統工芸と文物保護の集成的・総合的な研究が行われている。

2008年7月23日、アジア・太平洋地域の世界遺産教育研究センターが、北京大学に設立された。同センターは、ユネスコが唯一発展途上国に設置した、世界遺産に関する教育と研究を行うII類組織であり、その創立は画期的な意義を有するものである。

以上、述べてきた研究機構とは異なり、伝統文化と深くかかわって北京地方文化を中心に研究する機構もある。その代表的な組織が、北京聯合大学の北京学研究所である。同研究所は1998年に成立され、「北京に立脚し、北京を研究し、北京に貢献する」を掲げ、北京の現代化建設と発展、北京歴史文化名城の保護と発展、北京歴史文化の伝承と発展に取り組んでおり、北京市レベル、全国レベル、国際的なレベルの学術交流を行い、北京と各地の地方学・地方文化研究に積極的影響をもたらし、大きな成果を遂げてきた。同研究所は2005年、北京市哲学社会科学研究拠点に選ばれた。

北京地方文化活動に貢献した機構は多いが、ここで言及しなければならないのは、北京市政協文史委員会、北京市文史研究館、北京市社会科学連合会、北京市哲学社会科学発展企画事務所、北京市社会科学院、文化局と文化館関連、文物局と文物管理所関連、地方誌関連、博物館関連、図書館関連、図書出版関連、マスコミ関連などである。これらすべての組織・機関の協同によって、北京市の文化遺産の保護と伝統文化教育活動が大きな発展を遂げたのである。

学校教育における伝統文化教育は、児童・生徒に対する「素質教育」¹⁰の中で行われている。「素質教育」における取り組みには2つの方向性がある。一つは、伝統文化の内容を、授業や教科書に取り入れることである。このやり方は最近、強化されてきている。2008年、中国政府教育部は、京劇を小中学校の授業や教科書に取り入れることを指示した。北京市北緯中学校が自主的に編纂した『中国伝統祝日文化』と『空竹』¹¹は、道徳教育教材として授業科目に載せられた。これは、北京市の小中学校において伝統文化教育活動を推進する上で、非常に有意義な試みとされている。もう一つは、「第二クラス」（課外活動）を通して、児童・生徒を伝統文化活動に参加させることである。このやり方は多くの大学・中等学校（中学校・高等学校）・小学校に採用されている。中等学校と大学では、学生のクラブ活動は非常に活発化しており、そ

の内容の多くは伝統文化につながっている。北京市聯合大学の場合、学生民族音楽吹奏楽団は香港や外国で公演し、学生曲芸団は中国の中央テレビに数回出演している。さらに最近の報道によると、北京三十五中学校の金帆楽団は国家大劇院で演奏を行った。伝統文化推進活動における成功例は少なくないが、「非物質文化遺産」に直接関わる学生団体の活動は、今のところまだわずかである。

2008年11月、中国政府の文化部・教育部と全国青少年校外教育聯席會議實施本部辦公室（實施本部）が、「校外活動の場における未成年者の非物質文化遺産傳承教育活動の展開について」を共同で発表した。北京市はこれに対し、積極的な姿勢を示した。今後、北京市の非物質文化遺産と傳承者に対し、より多くの展示プラットフォームを提供することが可能になり、また未成年者に、より多くの非物質文化遺産に触れる機会を提供することができれば、非物質文化遺産の傳承者やそこに注目する人々が増加し、非物質文化の保護と傳承に必ずや、有意義な影響をもたらすであろうことを信じる。

確かに、北京の小中学校には現在、一流大学に合格することを学習の唯一の目的とし、伝統文化教育を排斥する児童・生徒や保護者もいる。だが、これは、小中学校の教育における問題の焦点になるものではないだろう。全体的に見れば、北京市民においては、素質教育の方針と心身の全面発達という教育目標への認知度は高い。このことから、小中学校における伝統文化教育の勢いを、持続・発展させていくことは可能だと思われるのである。

【訳注】

- 1 同訪問は、平成19 - 21年度の科研費研究『「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する研究』（研究代表者：渡邊洋子）による「伝承文化と生涯学習」研究会の調査旅行の一環として実施されたものである。
- 2 「四旧」とは旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣を指す。文革大革命は、1966年5月16日、共産党中央が打ち出した「五一六通知」より始まり、同年6月1日人民日報社説「横扫一切牛鬼蛇神」（迷信をすべて破棄するの意）に、「破四旧」とのスローガンが掲げられた。「破四旧」運動により、中国の伝統文化は非常に大きな被害を受けた。「破四旧」運動は紅衛兵によって行われ、破壊されたものには、洞窟の壁絵、寺院の仏像、古跡、蔵書、名画、個人所蔵の工芸品のような文化文物が多い。「破四旧」運動はこの文革の前期に激しかった。
- 3 ユネスコ「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」第1条では、「文物」について、次のように定義している。「文物とは、歴史、芸術、または科学の視点から見れば、普遍的価値の高い建物、碑彫と碑画、考古の価値がある性質成分、構造、銘文、洞窟及び連合体である」。「文物」の定義については他に、『現代漢語辞典』における「文化の発展史上価値のある、歴史的なもの、例えば、建築、碑刻、道具、武器、生活器皿及び各種芸術品である」、『辞海』での「文物とは、社会に残され、または地下に埋蔵されている歴史文化遺物である。一般的には、（1）重大な歴史事件、革命運動と重要人物に関わる、記念の意義と歴史の価値を有する建物、遺跡、記念物など（2）歴史的、芸術的、科学的価値のある古文化遺跡、古墓群、古建築、石窟寺、石刻など（3）各時代の価値のある芸術品、工芸美術品（4）革命文献資料及び歴史的、芸術的、科学的価値のある古い図書資料（5）各時代の社会制度、社

会生産、社会生活を反映できる、代表的な実物」という定義がある。なお、日本のユネスコHP

<http://www.unesco.jp/contents/isan/treaty.html>では、「文物」は「記念工作物」と訳されている。

4 ユネスコHP：<http://whc.unesco.org/archive/convention-ch.pdf>（中国語版）を参照。

5 人文オリンピックについては以下の注8を参照。オリンピックの基本理念により人間文化の発展を推進しようという官民の運動。具体的理念として「保用井・桜井景观・成片整治・形成风貌」が挙げられる。

6 「国家級」のこと。ランクは認定主体の規模を表し、国家や省、市など単位ごとに異なる。

7 2009年2月現在。

8 英語では**culture-enriched Olympics**と言われる考え方。『人民日報』海外版によれば、北京市オリンピック委員会の主任刘淇は、ある北京市の建設発展のための大会で、次のように述べた。人文オリンピックの理念によれば、われわれは人類共同の特性を重視すると同時に、各国の文化の違い、民族の違いを考えなければならない。オリンピックに参加する人のために、平和・友好の文化を作る必要がある。

9 北京オリンピック期間中、オリンピック公園に72～108平米の「祥云小屋」30館が建設され、ビデオ、現場の演出などを通して、中国の非物質文化遺産が展示された。

<http://image.baidu.com/i?tn=baiduimage&ct=201326592&cl=2&lm=-1&pv=&word=%CF%E9%D4%C6%D0%A1%CE%DD&z=0>。

10 素質教育には道德素質教育、知力・能力素質教育、心理素質教育、審美素質教育、身体素質教育、労働素質教育がある。伝統文化教育は審美素質教育に含まれるとも考えられる。

<http://www.moe.edu.cn/edoas/website18/level3.jsp?tablename=1380&infoid=1203387602460569>（京劇を小中学校の音楽の授業に入れている事例）

11 道德の書籍。<http://book.kongfz.com/925/76848180/>

[補注]

本稿は、張妙弟・張帆「情况与見解—与日本“传统文化活动”課題組的交流」『研究成果報告書「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究』（研究代表者 渡邊洋子、2009年3月刊、130－138頁所収）を日本語訳したものである。張周伯の手による翻訳原稿に渡邊が文脈等を考慮した校閲を加え、張周伯との協議・確認作業を経て、本稿を完成させた。それゆえ、本稿の翻訳文に関わる最終責任は、すべて渡邊にある。